

八百三十一年、かあらいるガソノ著さあた、り
さあたすノ原稿ヲ懷ニシテ、倫敦ニ出デ、六ヶ
月間滯留シテ居ル間ノ事デアツタ。同年八月二
十九日かあらいるがくれいげんばとつくニ殘シ
タ妻ヘ寄セタ手簡ノ一節ニイフ。

(1) 第三ニ、ぢよん・みる、『時代ノ精神』、他ノ
二人ハ汝ハ既ニ知ツテ居ル。コノ年少ノみるハ、
私ガ思フニ、吾等ノ愛スル事ガ出來ル若者デア
ル。瘦セギスデ、ヤヤ背高ク上品ナ青年、小サ
ク晴レ晴レシイ、羅馬型ノ鼻ヲセル顔ト、小サ
ク眞面目ニ微笑メル如キ雙眼トヲ持ツテ居ル。
謙讓デ、物ノ言ヒ方ガ著シクキツバリシテ居テ、
情熱アレドモ、澄明、且ツ平靜デアル。偉大ト
イフニハアラザルモ、明カニ才幹アリテ愛スベ
キ青年デアル。私ハ殆ド四時間程、近頃ニ無イ
愉快ナ話ヲシタ。コノ青年ハ殆ド戸口マデ私ヲ
送ツテタレタ。彼ハ謙讓ノ許ス限ニアカラサマ
ニ、私ハ(アナタ)神秘派ノ首領ニヨツテ改宗サ
セラレマシタトイツテ居ルヤウデアツタ。サウ
シテ親シク私ニ對スル際モ、彼ハ心カラナル尊

社會批評家トシテノ
かあらいる (二)

石田 憲 次

コレヨリ前、かあらいるハぢよん・すちゆあー
ど・みるト相識ノ間柄トナツテ居タ。ソレハ千

(1) Fronde, Thomas Carlyle Vol. 2. p. 153.

敬ヲアラハシテ居タ。」

同年十一月十日かあらしいるガ母ニ宛テタル手簡ニ曰ク、

「私が一番關係ノ深イ弟子或ハ交友ハちよん・みるトイフ男(有名ナル蘇格蘭ノ息)、⁽¹⁾ぶらゝ家ノ者ト懇意デ、私ニハ大變ノ氣ニ入りデス。さあたあ・りさあたすノ出版ヲ依頼スル爲、書肆ヲ歴訪シタかあらしいるハ何所デモ劔モホロロノ挨拶ヲ受ケ、六ヶ月ノ滞在後携ヘ來リシ原稿ヲ再ビ懷ニ納メテ蘇格蘭ニ歸ツタ。併シ彼ガみるヲ識ルニ至ツタ事ハ彼ノコタビノ倫敦訪問ノ第一ノ褒賜デアツタ。ふるうごノ筆ヲ借りナイヘバ、「年少ニシテ無邪氣ニ、感受性ニ富メルみるハ深クかあらしいるニ動かサレタ。みるハ眞理ガ如何ナル形ニ於テ提示セラレヤウトモ、ソレヲ認ムル本能ヲ有シテ居タノデアアル。……彼等ハ現在ノ社會狀態ニ對シテ憤慨ヲ等シクスルニ於テ、人々ガ自己ノ精神上ノ信仰ノ空虚ヲ、不誠實ナル表白モテ我ニモ他人ニモ蔽ハントスルニ對シ侮蔑ヲ等シクスルニ於テ、

相同情シタ。而シテみるモかあらしいるモ各自ノ主義ノ爲メ如何程相離ルルニ至ルベキカハ猶悟リ得ナカツタノデアアル。ぼずゑるノちよんせん傳ニ對スルかあらしいるノ評論ハみるヲ喜バシタ。彼ハソレヲ再三再四熟讀シテ、始カラ終マデ殆ド暗誦スル事ガ出來タ。彼ハ理智的誠實ノ理智的才能ニ優越セル事萬々ナルヲ認メタ。彼ハ進歩ノ聲喧シキ間ニ於テ、近代ノ思想ノ淺薄無力ナルヲ認メタ。彼ハ自ら謙虛ナルかあらしいるノ弟子ナリト公言シタ。而シテげえてノ偉大ヲ信ズルニ至ラン事ヲコレツトメ、(併シ彼ハ猶ソノ偉大ヲ信ズルヲ得ザル事ヲ認メテキタ)。而シテ更ニかあらしいるノ自己ニ優レル事ヲ無邪氣ナル謙虛ヲ以テ認メントシテ居タ。」

カタシテ彼等ノ交情ハ益々濃クナツタ。倫敦トくれいげんばとつくトノニハ、書簡ガ頻々トリカハサレタ。かあらしいるガ佛國革命ノ研究ニ興味ヲ持チ來ルヤ、みるハ追憶記、小冊子、新聞ノ類ヲ貸與シタ。かあらしいるガ背水ノ陣ヲ張ルツモリデ、くれいげんばとつくノ高原ヲ下

(1) Carlyle が始メ家庭教師ナナセシ家ソノ家ノ長子 Charles Buller ハ Mill ノ友人ニシテ最モ前途ヲ矚目セラレシ政治家ナリシガ、不幸ニシテ夭折セリ後ニ出ヅ
 (2) Froude, Thomas Carlyle Vol. 2. p. 220

リ、倫敦ニ來ルトノ報ヲ得テ、最モ喜ンダモノハ矢張みるデアツタ。併シかあらいるハ全然然るト意見ガ一致シテ譯デハナカツタ。後年ノ乖離ノ萌芽ハ既ニ此ノ時分カラ十分ニ存在シテ居タノデアアル。かあらいるハ唯比較的意見相近シトイフヲ以テ、急進主義ノ人ト相近イタノデアアル。

千八百三十四年五月三十日、かあらいるガ倫敦ヨリ故郷ノ母ニ送ツタ手紙ニハ、彼ノ特異ナル位置ガヨクアラハレテ居ルノデアアル。

「私ノ知ツテ居ル中デ、一番譯ノ分ツタ人間ハみるデス。サウシテ先方デモ愈私ニ懐イテ來タヤウデス。彼ノ仲間ハソノ上、兎ニ角誠實デ正直ダトイフ長所ヲ持ツテ居リマス。私ハ他ノ輩ト關係ヲツケル位ナラコノ仲間トサウシタイト思ヒマス。併シ猶ホ私ハ多クノ重要ナル點ニ於テ、孤獨デアアル事ト覺悟セネバナリマセン。」

後年かあらいるコノ手紙ニ脚註ヲ加ヘテ曰ク「急進主義者ニハ毒ガナイ。積極的眞理ニ對スル理解乏シキモ、偽善ハ全ク無イ。故意ニ虛

偽ト提携スル點モ無イ」ト。かあらいるノ社會問題ニ對スル思想ガ全ク世ノ常ノ範疇ニ入ラザルモノデアツタ事、彼ガ全クノ一騎武者デアツタ事ハ、コレヲ以テ明カデアアル。」

レヨリ前、千八百三十四年一月、みる及ビぶらあ等ガ急進黨ノ機關雜誌ヲ發行セントシ、かあらいるニ寄稿ヲ依囑シタ時モかあらいるハ離レタ態度ヲ取ツタノデアツタ。同年一月二十一日、彼ガ羅馬ニアル弟ぢよん・かあらいるニ宛テタ⁽¹⁾手簡ノ一節ニイフ。「私ハ其ノ雜誌ハ金ガアリサヘスレバ、少クトモ三年ハ續クダラウト思フ。相當ナ報酬ザヘスレバ、一ツニツ論文ヲ書イテヤツテモヨイ。ソレデナケレバヤラス迄ダ。急進主義者ハ私ガ常ニイフ事ダガさはら沙漠ノヤウニ乾燥無味デアアル。併シ毒ハ無イ。私ノ世界ノ豫言ニヨルト、彼等ハワガ先陣デアアル。私ハ正直ニ彼等ノ成功ヲ望ンデ居ル」ト。⁽²⁾かあらいるハマタちやーるず・ぶらあノ催シニ係ル急進黨ノ會合ニモ出席シタガ、ソレハタダノ好奇心ヲ充ス爲メデ、彼モ自白セル如ク、多ク

(1) Froude, Thomas Carlyle Vol. 2. p. 326

(2) Do p. 371

ノ興味ヲ感ジタ譯デハナカッタ。

私ハ以上ニ於テ、かあらいるニトシテ、社會國家ノ問題ガ如何ニ重大喫緊ノ問題デアツタカヲ幾分明カニシ得タカト思フ。彼ノ社會論、政治論ハ文學者一場ノ筆戯乃至下手ノ横好キデハ無カツタノデアアル。彼ハ書カザルヲ得ズシテ彼ノ社會論ヲ草シタ。ちやあちすむヤ「過去及ビ未來」ハ彼ノ心血ノ凝リ固ツタモノデアアル。我々ハコレ等ノ述作ニ近ヅクニ、極メテ眞摯敬虔ナル態度ヲ以テスルヲ要スルト思フ。又、私ハ彼ノ政治的地歩ガ、ほいぐニアラズ、どおりの非ズ、又らぢかるニモアラザル事ヲふるうぞニヨツテ述ベタ。併シ彼ノ此ノ獨立ノ地歩ハ、彼ノ此ノ方面ノ述作ニ最モ遺憾ナクアラハレテ居ルト思フニヨリ、私ハ直ニコレヲ述作ノ研究ニ入ラムト欲スルノデアアル。(未完)